
S M二元論の主張

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SM二元論の主張

【Zコード】

Z5746J

【作者名】

つきてつくる

【あらすじ】

あたしつてば、ちょ一筋金入りのM女なわけ。でね、この世にいる全ての人間は絶対SかMのどっちかに当てはまるんだって、ずっと信じたの。ところがね……（ボクの創作仲間である名野創平先生の作品からヒントを得て書きました）

「Jの作品を、創作仲間である名野創平先生に捧げたいと思います
……ふすつ（笑）

およそこの世に生をうけたすべての人間は、程度の差こそあれど
かMのいずれかに分類される、つてゆーのがあたしの持論なのね。
「え、俺は違うよー」なんていう虚偽妄想は許さない。だってあた
したちの生きてるこの世界つて、なにかにつけ天地万物みな一極分
化されてると思うのよ。たとえば男と女でしょー、あ、オネエは
このせい脇においてね、あと陰陽道で言つところの陰と陽でし
ょー、勝ち組に負け組でしょー、それからほら、草食系、肉食系な
んて言つじやない。え？ 論点がズレてる？ いいんだつてば、あ
たしが勝手にそう思つてるだけなんだからあ。まあとにかく、人は
老若男女、生殖能力の旺盛か否かにかかわらずみんなかMどち
らかの資質を持ち合わせていると思うわけー。

ちなみにここで言つうは硫黄の元素記号じやないし、Mも浜崎あ
ゆみの楽曲名じやないからねー、念のため。

そう、サディストとマゾヒストのことなのよん！

かくいうあたしは、もう筋金入りのDMなの一。

その素質はそうねえ、自分がまだほんの幼い時分からすでに備わ
つていたような気がするわ。うちの母つてばそれは厳しいひとで、
子どものあたしがちょっとでも悪をしようものなら「こんわん、こ
げんこつして！」って容赦なく尻をぶつたの。あ、ちなみにあたし
の出身地は鹿児島県ね。でね、お尻をぶたれるときつてスカート捲
し上げてパンツ下ろされるじゃない。あの冷やつとした緊張があた
しのお尻をなでる一瞬の、そうな、言つなれば諦観と期待感がない
まぜになつたような、めぐるめぐエクスターがもうたまらなく好
きだつたの。無防備なあたしの肉体にこれから情け容赦のない仕打

ちがなされるんだって考えただけで頭の中がぼーっとしてきちゃつて。うちの母つて若い頃バレーボールやつてたじゃない。だから手なんかスゴくおつきいし、そこから繰り出されるバイクといったらそれはもう強烈で、それでもって手加減なしにバッチンバッチンたたいてくるもんだから、もう気持ちいいのなんのつて……あたしつてば白目いたまま失神して何度も救急車ではこぼれたことがあるのよ。

あ、ちょっと話が逸れたわね。で、そんな超ドMな女の子のあたしだつたから、たとえ恋人が出来ても長続きしなかったのね。ほら、えつちの最中につい感極まって、

「ねえお願い、あたしのことぶつて……」

なーんてお願いしちやうでしょ。そつするとたいがいの子はず間違いなく引いちゃうわけ。ほんと、世の中つて軟弱でつまんない男が多いわよね。

でもね、中には案外そういうのに興味津々な子もいて、

「えー、君つてそういう趣味があつたのかい？」

なんて好奇心で目をきらきら輝かせたりするのね。で、あたしもこれは脈ありかな、なんて思つて試しにスパンキングとかさせてみるんだけど、そうするとね、最初はおつかなびつくりやつてたのが、だんだん楽しくなつてくるんでしょうね、もう目えつり上げて腕ぶん回していくし、しまいには自分のベルトとか持ち出して鞭の代わりに使つてくるわけ。革のベルトだと、SMプレー用のバラ鞭なんかと違つてくつきり痕が残るくらい殺傷力あるから、もうハンパンく痛いし、体の芯がじーんつて痺れるみたいになつて、しまいにはあたし、

「ああん、気持ちいい！ もつと強くぶつてー。もう、おっぱい食いちぎつちゃつてえー」

なんて夢中で体くねらせて哀願しちやうわけよ。めぐるめぐ富能のひとときつてやつ。こうこうの水魚の交わりつていうんだつけ？ 違つたかしら？ とにかくマジ感じちゃつて、あたしもう、いつ

そのまま死んだつていいくかもつ、なーんて本氣で思つたものなのよん。

でもね、そうやつてあたし好みのＳ男君を調教して、緊縛プレーとか思う存分堪能してたわけなんだけど、こいつのつて素人が見よう見まねでやるのスゴく危険なのよね。ある日、そいつが変な縛り方したせいであたし急に息ができなくなつちやつて「ぐるじい、じぬー、じぬー」つていうような事態におちこつちやつたの。でもそいつせんせん気づかなくつて、どうせ気持ちよくてよがつてるんだろうつて薄ら笑い浮かべながら見下ろしてくるのね。まあ、えつちのときはいつも「死ぬー」「死んじゃうー」つて叫んでたから仕方ないんだけど、でもそのうち頭にどんどん血が上つて顔がむくんでくるし、鼻水やよだれなんかもダラーつて垂れてきてせんせんシヤレになんない状況になつてきたわけよ。で、やつとそいつもおかしいなつて気づいたみたいで、あわてて縄ほどきにかかるんだけど、もう縛り目がぎゅつて固く締まつてるからどつにもなんないの。で、あたしはつていうと、だんだん意識が遠のいてきて、これまで自分が経験してきたＳＭプレーの数々が走馬灯のように頭の中をよぎつていいくのね。ああ、あのときは気持ちよかつたなあつて……。そうこうするうちに、とうとう頭の中の情景が、お花畠のひろがるきれいな景色と入れかわつちゃつて……。

で、結局あたしはそのまま死んじゃつたわけなんだけど　　。あはは、人の一生なんてあつけないものね。

それでね、あたしがすでに息してないつてことが分かると、そいつ真つ青な顔して部屋飛び出して行つちやつたのね。あたしの死体をそのままそこに残してよ。まあ一種の放置プレーつてやつね。けつきよく同じアパートの住人から異臭がするつて苦情を受けて管理会社の人が調べに来たのは三日後のことだつたわ。野次馬が注目するなか合鍵使つておそるおそる部屋に入つてみると、な、な、なんとそこには大股開きで縛られてるあたしの腐乱死体がどどーん……て、かわいそうに、あの管理会社の人もう一度と焼き肉とか食べら

れないでしょうね。

だけどね、SMプレー中に窒息死なんてぜんぜん洒落になんないわけだけど、悶絶しながら事切れる瞬間で、それはもう筆舌に尽くせぬくらいの快感だったわ。まあ、一生に一度しか体験できない超究極のMプレーってやつね。

てなわけで、死ぬまぎわにそんなすごい経験しちゃったもんだから、この世に未練が残つてしまつてね、死んでからもあたし、なかなか成仏できずにあてもなく下界をさまよつていたわけなのよん。

？？

い、い、後篇へつづく……（汗）

中篇（繪畫部）

「おんなれこ。書かれてなかつたので中篇をせやなあす（汗）

「ねえ、きみ……」

すきま風が吹きこむような声で背後から呼びかけられ、聰平はびくっと顔を上げた。なぜだか背筋にぞくぞくと寒気が走る。今のは空耳だろうか、それにしてはやけにはつきり聞こえた気がするが。後ろを振り向こうかやめようか迷つていると、ふたたび声がした。

「ねえつてばあ」

今度は少し鼻に掛かったような声だ。どうやら若い女性らしい。関わりたくない気もするが呼ばれたら返事をしないわけにもいかず、聰平は油の切れた扇風機みたいなぎくしゃくした動きで後ろを振り返つた。とたんに、わっと仰け反つてベンチから転げ落ちる。

「ひ、ひえっ」

すぐ後に、派手な格好をした若い人が立つていた。腰に手を当て、じっと聰平のことを見下ろしている。化粧こそ派手だがなかなかの美人だ。ふつうならば、はっと胸がときめくような場面だが、しかしそうはならなかつた。なぜなら彼女がクラゲのように半透明だつたからだ。そのスレンダーな体を透かして、背後に広がるテニスコートや銀杏の木立がぼんやりと見えてしまつ。

「お、お化け……」

聰平は、腰を抜かしたまま、ずるつずるつと後ずさつた。

「ちょっと、なんで逃げるのよ、もう失礼しちゃうわねー」

女は、網タイツをはいたきれいな足を跳ね上げてひらりとベンチを乗り越えた。タイトスカートの裾から、きわどいデザインの下着がちらりとのぞく。

「あわわわ……」

聰平は慌てて四つん這いになると、鞭で逐われる家畜のようになら死に逃げはじめた。

「こら待てっ」

すると女は、まるで捨てられた「ンビ」袋が風で舞い上がるよう
にふわりと身を浮かせ、そのまま、ゆいーんゆいーんとジグザグに
飛びながらあとを追いかけてきた。

「ひいいっ」

死にものぐるいで逃げる聰平の頭上を難なく飛び越えた女は、そ
の鼻先へすとんと着地して退路をふさぐ。いきなり眼前にセクシー
な太ももが現れ、聰平はのけ反つたはずみでころんと仰向けにひつ
くり返つた。

「きやはは、大げさな子ねえ。べつに怖がらなくともいいんだって
ばあ」

「だ、だつてお姉さん……、お化けなんでしょ？」

聰平が半泣きで言つと、女はぐいっと胸を反らせた。

「そうよ」

「ひえー」

裏返した亀のよつとぶさまに手足をぱたつかせた後、聰平は再び
起き上がり、転がるようにはげ始めた。

「ちょっと待ちなさいって言つてるでしょーーー！」

だが、地べたを這うものが空を飛べるものから逃れるられるはず
もない。すぐにまた女が飛んで来て逃げ道に立ちふさがる。ついに
聰平は観念して、その場にへたりこんだ。

「降参……、もう逃げないから取り殺さないで」

「うんうん、最初からそつやつて素直にひとの話を聞けばいいのよ
」
満足そうに微笑むと、女はまた水中をただようクラゲのように、
ゆわーんゆわーんと空を飛んで元いたベンチにふわりと腰かけた。
そして自分の隣をぱんぱんと叩く。どうやら横に座れとうながして
いるようだ。逆らつても無駄だと分かり、聰平はまるで筋肉の代わ
りにバネでも仕掛けられているようなぎこちない歩きでベンチへと
戻つていった。そして女からきつちり一人分の間隔をとつて腰掛け
る。

「そ、それで……、あの、僕に何かご用でしょうか?」

天敵を警戒する齧歯類のような眼差しを向けて聰平が訊いた。すると女は、うつてかわって優しい表情になり小首をかしげて見せた。「あんたさあ、ソニー最近ずーっと自殺しちゃおうか、なんて考えたでしょ?」

「え?」

「隠したってダメよ、あたしにはひゃんと分かるんだからあ」女は、そう言つて意味不明の微笑みを見せながら、ずりつと「じり寄つてきた。

「幽靈つてね、普通の人には姿が見えないけど、病氣や怪我で死にかけてる人や、自殺しようなんて考へてる人には見えちゃうものなよ。だからね、あんたの目にあたしの姿が見えてるつてゆーことは、本氣で死にたがつてるつて証拠なのよん」

図星を指されて觀念したのか、聰平はしょんぼりうなだれてしまつた。そんな彼に、女はやわしく微笑みかける。

「あんた、中学生?」

「……はい」

「ひょつとして、がつこでイジメにあつてるとか?」

「……い、いえ」

「違うの?」

「……は、はい」

「あたしの思い違いだつたかしら?」

「……いえ」

「どうちなのよ?」

「……はい」

「えーい」

女が恐い顔で立ち上がつた。

「もう、はつきりしなさいつてばあつー。」

「うひや」

大声に驚いて再びベンチから転げ落ちる。どうやらかなり氣の短い幽靈のようだ。聰平は、やつとの思いで身をおこすと、まるで口

ツクツクライミングでもするように、ずりつずりつとベンチへ這い上がった。そして女を警戒しながら端っこのはづきにょけよこんと座る。一度大きく息をついて、それから聰平は少し怨みがましい視線を女に向けた。

「でも、お姉さん……。もし僕が学校でイジメにあつてるとこか、それがお姉さんに何の関係があるつていうの？」

すると女はやさしい笑顔にもどり、聰平にぴたり身を寄せてきた。彼女の体は、まるで石かガラスで出来ているみたいに冷たくて、聰平は思わずぶるつと身震いする。そんな彼の肩になれなれしく手を回し、女は耳元で囁いた。

「……あのねえ、あんたが学校でどんな風にイジメられてるのか、そのへんのことをお姉さんに詳しく述べてほしいの」

相談に乗ってくれるといつことだらうか？ 聰平は少しだけほつとした。最初見たときは悪霊のたぐいに違いないと思つたが、意外と生きている人間のことを助けてくれる良い霊なのかも知れない。

「なるべく具体的にね、臨場感をこめて」

「は、はい」

聰平は、それでもしばらくなあいだ俯いたまま膝の上でからめた指をこにょこにょ動かしていた。ちらと女に目をやる。彼女の黒目がちな瞳が、好奇心にみちてきらきら輝いていた。そこでよつやく意を決し、聰平はおずおずと顔を上げた。

「……うちのクラスにね、木戸つてやつと山崎つてやつがいて、そいつらがいつもクラスの誰か一人をターゲットにして、ひどいイジメをするんだ。ターゲットにされた子はそれは悲惨で、学校に出てこなくなるまで徹底的にイジメられるんだよ。でもクラスのだれも、あいつらには逆らえないんだ。それどころが、機嫌を損ねないよう一緒になつてイジメをやってる。だつて目を付けられるといつ自分がターゲットにされちゃうか分かんないからね。僕の前にイジメられてた子なんか、登校拒否を繰り返したあげくに自殺未遂して……今は精神病院に入ってるよ」

「ふーん……」

女が気のない声で相づちをうつた。あれ？ てっきり親身になって聞いてくれるものと思っていたのに。聰平はちょっとだけ拍子抜けした顔になつた。

「でね、木戸つてやつの親は、なんか政治の仕事をしてる偉い人らしくて、うちの学校のPTA会長とかもやつてるんだ。だから先生がたはもちろん、校長先生だって木戸の親に会えばいつもペコペこしてるし、そのせいで先生は、木戸たちがどんなに悪いことしても見て見ぬふりをするんだ。おかげで、あいつらいつでもやりたい放題さ」

聰平がそこまで語り終えると、女はつまらなさそうにため息をついた。

「あのねえ、あたしが聞きたいのはそういうことじゃなくって」「はあ……」

驚いて目を瞬かせている聰平の耳元に唇をよせ、女がもう一度囁いた。

「具体的にどんな辱めを受けてるかってことなのよん。ほら、顔をひっぱたかれるとか、カンチョー！ って叫んでお尻の穴に指突つ込まれるとかさ、あともしかしたら裸で縛られて溶けたローソク垂らされるなんてのも、ね、色々あるじゃない……」

ああ、やっぱりこのお姉さん悪靈だ。

聰平は、確信した。

じ、次回こそ本当に後篇です！

も、むはや言こと説はすまこ……。

熱をおびた女の視線が、痛いほど聰平に突き刺さつてくる。それは恍惚として輝いていながらも腐りかけた果汁のように濁っていた。例えるなら、セックスをねだるときの女の目だ。そんな魔性をおびた眼光に射すべくられ、聰平は体を強ばらせたまま鳥肌を立てていた。

自分はどんでもないと関わり合つてしまつた。

あつと悪靈に違いないんだ。

「ねえ……」

彼女が、また囁いた。グロスに濡れる上唇をペロリと舐める。甘酸っぱい息がただよつてきて、聰平は軽いめまいを感じた。女の指がすうっと伸びてきて、派手にペイントされた爪の先が聰平の頬を上下に撫でる。やがて彼はすっかり女の毒気に当てられ、身じろぎすら出来なくなってしまった。ただ黙つて女の顔を見つめているしかない。

その女の、口の合間から覗く白い歯が、その奥でうねうねと蠢くピンク色の舌が、そこから発せられる湿りをおびた息が、何度もひづ囁いていた。

イジメラレテルンデシヨウ？

ついに聰平は、じくじとうなずいてしまつた。

「はい……、僕は学校でイジメにあつています」

すると女はにんまり笑い、今度は耳に触れるほど唇を近づけて、じづ囁いた。

「じゃあ、学校でどんな風にイジメられてるのか、お姉さんに詳しく述べ、お、し、え、て」

聰平は膝のうえに置いた拳をぎゅっと握りしめた。自分へ向けら

れたイジメに関する記憶は、極力意識の外に置くようにしている。いわゆる現実逃避というやつだが、それゆえ、心の封印を解いて自分が惨めな思いをしたその内容を語るということは、もう苦痛以外の何者でもない。彼は一度唇をきゅっと噛み締めてから自分のつま先へ視線を落とし、そして絞り出すよつた感じで、とつとつと語りはじめた。

「……例えば、よく僕の下駄箱からは上履きが盗まれています。たいてい代わりにトイレ用のスリッパが入れられていて、上履きは、どこかの教室のゴミ箱か、男子用トイレの便器の中へ放り込まれているんです」

聰平がやつとやつまで語ねど、女は両手で頬を包み込んで夢見るよつな顔つきで呟つた。

「まあ素敵。スリッパをぱたぱた鳴らしながら必死になつて自分の上履きを探している、その姿をみんながにやにやして眺めてる。いわあ、それってぜつたい屈辱的よねー」

女が綴ぎをねたる

「はい、朝、教室へ入ると

「うんうん、教室へ入ると？」

とこれからが六〇分が飛んできて、僕の後頭部を直撃して、僕は二度目のハーフバーレーをうけた。二度目のハーフバーレーは、僕の頭部を直撃して、僕は二度目のハーフバーレーをうけた。

二十九

「おお、ヤシメられてないで感じますよ。」

1

女は手を打つて少女のように泣きしゃいだ。なにが面白ことこのうのだ。聰平は少しうつとなつたが、しかしつとめて表情には出せないよう心がけた。悪靈を怒らせると後が怖い。

「それとですね、僕の机にはいつも落書きがされてるんですね」

「落書き？ どんな？ 『豚野郎』とか？」

「いえ……、『お前なんか学校に来るな』とか……『たのむから死

んでくれ』とか……『卒業まで毎日地獄を見せてやる』とか……しだいに気持ちが高ぶってきたらしく、聰平の声が涙まじりになる。いっぽう女はとこうと、こちらも気持ちが高ぶってきたらしく、さかんに身悶えながら語っていた。

「あん……、言葉で責められるのって快感。あたし『メス豚』なんて言われたらマジいつちやうかもしないー」

「ほ、僕がイジメられていることが、そんなに面白いですか？」

聰平が涙目で抗議すると、女はきやはは！ と笑った。

「バカねえ、あんたがイジメられたって別に面白くもなんともないわよ。あたしはね、あんたがイジメられてる状況を自分のことに置き換えて、それで空想の世界にひたっているわけー」

「お姉さんには分からないんだ。毎日毎日、僕がどんなにひらい思いをしているか……」

「えー、なに贅沢なこと言つてるのよー。もう羨ましいつたらありやしない、あたしが代わってあげたいくらいだわ」

そう言って軽く睨んでくる女に向かって、聰平は涙をぬぐいながら言つた。

「じゃあ、ボクと代わってください。じつはもうすぐこく、さつき話した木戸と山崎が来るんです。奴らは小遣いを使い果たすと、いつもこうやってボクを呼び出しては金を巻き上げるんです。でも、もうボクには奴らに渡すお金がない。この前、母の財布からお金を抜き取るところを見つかってしまった。もうボクにはお金がない。だから黙つて奴らに殴られるしかないんです。もういやだ、ボクはこんな毎日にはもうウンザリしてるんです。いっそ死んでしまいたい。ねえ、お姉さん、そんなにイジメられるのが好きなら、ボクと入れ替わつてくださいよ」

すると女は聰平の両肩をがつしりと掴んで、その顔を真正面から睨みつけた。そして獲物を追いつめた肉食獣のようなぎらついた目で、こう言つた。

「それホントね？ あたしがあんたに取り憑いてもいいのね？」

聰平は、ひるんだ。感情にまかせて自分はとんでもないことを言つてしまつた。この悪霊は、完全に本気だ。どうしようつ……。しどろもどろになつていると、女が重ねて言つた。

「じゃあ今からあなたに乗り移るから、ちょっとのあいだ目を閉じててくんな。だいじょうぶよ、痛くないから」

「え、いや、自分は別にその……」

「ほら、早くう。あんたの望みを叶えてあげるんだからあ、黙つてあたしの言うこと聞きなさいつてばあ」

「いや、さつき言つたのはものの例えで……」

「煮え切らない聰平を、女が一喝した。

「しゃからしがあつ！」

とつぜん飛び出した鹿児島弁に恐れをなしたのか、聰平は覚悟をきめてぎゅっと口を閉じた。くすくすと女の忍び笑いが聞こえる。と……、あの甘酸つぱいような吐息が次第に鼻先へ近づいてきて、聰平は少なからず狼狽した。

「え、これって……。

いきなり女の熟れた唇が聰平のそれと重なつた。ひやりと冷たくて、しかも柔らかい感触がまるでデザートの果物を思い起させる。すぐに女の舌が押し入つてきて、聰平の口の中をウネウネとかき回した。やがてふわっと甘い唾液が大量に流れ込んで、聰平はそれを、喉を上下させてコクコクと飲み込んだ。同時に、何者かが強引に侵入してくる感覚におそわれ、しだいに体が麻痺してゆく。やがて彼は、おのれの体の中が、なにがとてつもないエネルギーで満たされてゆくのを感じた。

「ああ、彼女が入つてきた。

遠のく意識のかたすみで、聰平は、勝ち誇つたような女の笑い声を聞いた気がした……。

後篇の前篇（後書き）

次回こそ完結すると思っています。……たぶん。

ははは……（汗）

木戸と山崎が盗んだ自転車に一人乗りしてやつて来たのは、それから間もなくのことだった。すぐに聰平のことを見つけ、へらへらしながら近寄つてくる。一人ともひょろりと背が高く、見るからに頭の悪そうな顔をしていた。とくに山崎のほうは、鼻につけたピアスが酸化して黒ずみ、まるでホクロか巨大なハナクソをついているようにも見える。一人はのらくらとペダルを踏みながら聰平の前までやつて来ると、きいっとブレーキをきしませて自転車を止めた。

「おいこらっ、金は持つて来たんだろうなあ？」

木戸が、ぐつと聰平を睨みつけて凄んだ。自分ではドスを利かせたつもりだろうが、いかんせん変声期の途中なので迫力に欠ける。それでも流行の服を下品に着くずし、アクセサリーをじゅらじゅら鳴らしている彼らの存在は、やはり聰平にとつて脅威だつたに違いない。

彼はのつそりと自転車の荷台から降りると、噛んでいたガムをペつと吐きすてた。

「おい、どうなんだ、調子こじりでダンマリ決めてつと、またこの前みたいにパンツ脱がすぞ」

そう言つて山崎と顔を見合させ笑つた。威嚇をこめた下卑た笑いだ。しかしそれを聞いた聰平は、とつぜん身をくねらせ始めた。

「ああん、それなら自分で脱ぐからそう命じてよつ」

笑い声がぴたりと止んだ。木戸が眉間にしわを寄せ、聰平の胸ぐらをつかむ。

「あん？ なに言つてんだ、おめー？」

彼の、渾身の三白眼がぐつと睨みつけてくる。不良のお兄さんがたというのは、どこでこういう恐い顔のつくりかたを練習しているのか、なかなかに堂に入った迫力ある表情だ。しかしそんな彼を熱っぽい視線で見上げながら、聰平はうふっと媚びた笑みを浮かべた。

「その田、いいわあ……、サディストの田ね、あんた素質あるわよ」「はあ？」

「ねえお願い、あたしにパンツ脱げって命じて、すつ裸になつてそこへ跪けつて命令してよおん」

木戸は思わず聰平の服から手をはなし、顔を引きつらせながら後ずさつた。

「な、なんだこのやうう、急に変な声出しあがつて……」

彼の腫れぼつたいた目が不安げにおよぐ。まるで、てつきりカブトムシだと思って捕まえたらじつは、ヨキブリだった、みたいなそんな顔だ。いっぽうの聰平は、すでに嬉々としてズボンのベルトを外にかかっていた。ついでに、うつふんと意味不明のウインクを送つてくる。木戸はなんだか薄ら寒くなり、山崎のほうを振り返つて田で助けを求めた。

「お、おい、こいつ頭狂つてるぞ……」

「ばーか、笑いをとつて、こまかそつとしてるんだよ。かまわねえからボコッちまおうぜ」

へらへら笑いながら、山崎が自転車から降りた。前歯が一本抜け落ちていて本当にバカっぽい顔をしている。彼はルーズフィットのジーンズをずるずる引きずりながら聰平の前までやってくると、いきなりその頬を張つた。ぱーん、といい音がして聰平の小さな体がぐらりと揺らぐ。

「へたな芝居うつてんじやねえぞ、こひあ！ タツタヒ金よこせつつつてんたるが！」

そう叫んで、今度は腹に蹴りを入れた。うつと呻いて、聰平が前屈みになる。そこへ気を取りなおした木戸が横から割り込んできて、髪の毛をわし掴みにしながら自分のほうへぐいっと引き寄せた。

「おいこら、これ以上痛い目に遭いたくなかったら……」

しかしそこで彼は、はつと息を飲んだ。みるとまつたに表情が凍り付いてゆく。

聰平の顔が、にたーつと笑っていたのだ。

半びらきにした目が裏返つて、口の端からはよだれがたれている。

なにか悪いクスリでもやつてるんじゃないのか？ そう疑いたくな
るような陶然たる面持ちで、薄ら笑いを浮かべているのだ。

「ああ、久しく忘れていたわ、この感覚……。体の奥がもうじびれ
ちゃうつて感じ。なんて言つかな、おへソの下のほうでバターがじ
ゅんつて溶けちゃうみたいな気持ち。もう一度この快感が味わえる
なんて、まるで夢のよう……。ねえ殴つて、お願ひ、もつと本気で
あたしのこと殴つてよう」

そう言つて、木戸のジャンパーにすがりついてくるのだ。

「わわわつ、なんだこいつ気持ち悪い」

木戸は、大慌てで彼の手を振りほどくと、飛び退いて言つた。

「おい、やばいよ、こいつやつぱ頭おかしいよ」

「ちくしょつー！」

山崎が、怒りにまかせて聰平の尻を蹴り上げた。きやつと叫んで
聰平がうずくまる。その背中をさらに靴のかかとで踏みにじつた。
「てんめえ、ふざけたことばっかぬかしてると……」

「ああん、踏まれるのって、ちょー屈辱的でめっちゃ快感ですうーー

聰平が身をくねらせながら熱のこもった視線で見上げてくる。山
崎のバカっぽい顔にも、ついに恐怖の色が浮かんだ。

「ひいつ、ななな、なんだこいつ

そして恐怖心に駆り立てられるように、倒れている聰平を狂つた
ように蹴りはじめた。

「こいつめー、このつ、このつ 」

そこへ木戸もやってきて、恐る恐る仲間に加わる。

「い、このやうひ、変態つ、死ねつ、死ねつ」

そんな必死の形相で襲いかかる一人を尻目に、聰平はさらなる快
楽を得ようとズボンを下ろしにかかった。

「ちょっと待つてね、今ズボン脱ぐから……あん、やだなこよこ
れー、もう前が膨らんじゃつて上手く脱げないじゃないの」

「だ、黙れっ黙れっ」

木戸のつま先が、聰平のみぞおちに食い込んだ。

「ぐまつ ちょ、ちょっと待つてね、今ズボン脱ぐから……」

「う、うるさい、喋るんじゃねえ」

今度は山崎の蹴りが背中にあたる。聰平は体を弓なりに反らせた。

「うまつ

ち、ちよつと待ちなをこつてば、ズボン脱げないじゃ

ない……」

「ひじつ、変態、死んでしまえ」

さらに木戸の靴底が、聰平の顔面をとらえた。泥だらけの顔から鼻血がたれる。

「むまつ つて、ちよつとあんたらいに加減に……」

「変な声出すな、この化けもん」

「いよいよ、どどめだと言わんばかりに山崎が足を大きく振り上げた……。

と、そのとき 突然、聰平がぬつと起き上がつた。そして鬼の形相でくわつと田を剥ぐ。

「てげてげせんか！ こん馬鹿しつたんがあ！」

そう叫ぶと、山崎に飛びかかって、ぱんぱーん！ と往復ビンタを食らわせた。ついでに急所を思い切り蹴り上げる。

「ふぐつ……」

哀れ 、山崎は股間を押さえたままぐずれ落ち、そのまま泡をふいて動かなくなつた。そんな彼の様子を呆然と見下ろしながら、聰平はわなわなと身を震わせていた

「……ちよつとやだ、なによ今の？ ねえ、なんなの？ こいつ殴つたとき信じらんないくらい、ちょ一最高に気持ちよかつたんですけどあ」

ほんと、もうしわけないです（Ｔ－Ｔ）

後篇の後篇の前篇（カツアカ.....最終話）（前編）

やつと完結しました。ありがとうございました（トーナー）
内容がちょっとしたなのせ、このやつはいつぶりにやつてください
ネ。

山崎の股間を蹴り上げたとき、聰平は今まで体験したことのないようなもののすごい快感に襲われた。まるで感電したみたいに体が痺れ、エクスターが脊柱管を通してイナズマのように五体をつらぬく。それは今までマゾプレーでしか得られなかつた快感とは明らかに異質な感覚だつた。大量のアドレナリンが体中を駆けめぐり、彼は破裂しそうなほど高鳴る胸を押さえたまま、虚ろな眼差しを宙に向けた。

「……ちょっと、なんなのよ、いつたいビーサーこと、このくわガキのキンタマ蹴りつぶしたとき、なんか信じられないくらい気持ちよかつたんですけどお」

これまでの人生で、彼は被虐に耐えることでしか悦びを見いだせなかつた。自分はもう筋金入りのマゾヒストだと信じて疑わなかつた。だからセックスのときはいつも自分が虐げられることしか念头になかつたし、そういう願望を叶えてくれそうな男としか付き合わなかつた。しかし、たつた今自らが経験したこの未知なるエクスターシーは、むしろ今まで追い求めてきた快楽とはまったく逆の性質を持つように思われた。

あたし……、じつはサドだつたりして。

彼は、ちょっとのあいだ考え悩んだすえ、その答えを確かめるべく地べたにうずくまる山崎をもう一度蹴り上げてみた。ようやく急所の痛みも和らいで、もぞもぞと起き上がりうとしていたやれやれ、山崎は再びもんざりうつて地べたを転がつた。

「ひいいっ

さらにその顔面をスニーカーのかかとで踏みつける。山崎は、少女のような金切り声を上げ、顔を押さえてのたうち回つた。指のあいだから、だらだらと鼻血が流れ落ちる……。

「痛でででつ、や、止めろお

「

ああん、気持ちいい、他人を虐げるのがこんなに気持ちいいだなんて今までちつとも知らなかつたわ……。やばい、あたしいきそ。

聰平は、体の奥底からマグマのようにわき上がる暴力的な愉悦に耐えきれず、身悶えてはあはあと喘いだ。パンツの中身がびんびんに怒張しているのが分かる。自分の絶対的支配下におかれている無力な命を踏みにじるのって、なんて気分がいいんでしょう。もうムチでしばかれたりなんかするより、断然気持ちいい！

「た、たのむつ、もう止めてくれ。金ならいらないから、な、もう勘弁してくれ」

鼻血でまつ赤に汚れた顔を歪めてひいひい泣き叫ぶ山崎を見下ろしながら、聰平はにたりと口角をつりあげた。すでに目が完全に据わっている。油の膜をはつたように、てらてらと不気味に光っている。その狂氣じみた眼差しで、彼はまるで料理の具材でも吟味するかのように山崎の全身を舐めまわした。

「うふふ……あんたつて、可愛いわあ。待つてね、もつともつと虐めてあげるから」

それを聞いて、山崎は胎児のように丸まつたままガタガタと震えた。札つきの悪としてそれなりに修羅場をくぐり抜けてきたつもりだが、これほどまでに自分へと向けられた暴力に恐怖したことはない。イジメる側から一転してイジメられる側へと転落した喪失感。それはもう、裸のまま猛獸の檻の中で横たわるような心細さだつた。てつくり自分は山の頂きに陣取っているんだと思い込んでいたら、じつは深い深い海の底に沈んでいたのだ……。

恐怖にすり泣いている山崎にちらつと慈しむような視線を投げかけたあと、聰平はいきなりスニーカーの先端でその尾？骨を蹴りつけた。

「へげ
」

めきつと鈍い音がした……。

山崎は、声にならない呻きをもらすと体を弓なりに反らせ、びくんびくんと痙攣したまま動かなくなつた。目がくるんと裏返つてい

る。

「あらあ、坊やつてば、もう昇天しちゃったのね。つまんないわ……」

そのとせ、背後でカチッといつ金属的な音がした。ふり向くと、木戸が飛び出しナイフを右手に構えている。目が奇妙なほどにつり上がっていた。腰が引け、膝が笑い、聰平の狂乱ぶりに完全にビビつている様子だが、しかし彼はなぜかへらへらと笑っていた。どうやら人間というものは、恐怖の限界を超えてしまうと、いわゆる躁状態になるらしい。彼は手にしたナイフをひらひらさせて、口元をゆがめながら言った。

「えへへ、この野郎、やつてくれるじゃねえか。そつちがそういうつもりなら、こつちだつて本氣でいくぜ。これなんだか分かるか？　言つとくがオモチャなんかじやねえぜ。今こいつでブスつとえぐつてやつからよう、覚悟しな……」

しかしそれを見て、聰平は大好物のスウェーツを田の前にした女子の子のように舌なめずりした。

「あら、素敵だこと。そのナイフでもつて、あんたのおちんちん切り落としたら、さぞかし気持ちいいでしょうね？　ザーメンと血が混じり合つたら、ピンク色になるかしら」

「こいつ狂つてる。刃物をぜんぜん怖がらない。

ふたたび底知れぬ恐怖が、木戸の中でざざ波のように広がった。彼は半開きの口で、ぜえぜえあえぎながら後ずさりした。膝が面白いように震える……。

「ううう、このやつ、『太こいてんじやんえぞ！』近寄るんじやねえ。き、来たらこのナイフで膚のように切り刻んでやるからな、脅しじゃねえぞ」

「あら、それは楽しみ。切り刻んだつてかまわないわよ、ほーら、ほらほら、やつてござらんなさいな」

木戸は生睡を飲み込もうとしたが果たせなかつた。口の中がからからに乾いている。なにか言い返そうとしたが、喘息の発作のよう

に喉がひゅうと鳴つただけだつた。

「いいわ、あんたが向かつてこないなら、あたしがあんたを楽しませてあげる。もつ鰯のたたきみたいに体中の骨をバラバラにしてやるんだから」

聰平は薄ら笑いを浮かべたまま、ズボンの腰からベルトをすつと抜き取つた。そしてムチのようにだらんと提げる。そのままバックルの部分を重りにして遠心力をつけ、ひゅんひゅんと振り回した。そうしながら彼は、木戸との距離をじわりじわりと詰めていった。ナイフなど毛ほども恐れている様子はなかつた。いつぽうの木戸は、蛇に睨まれた蛙のように恐怖で全身をこわばらせていた。後ずさりながら石につまずいて尻餅をつく。やがて恐怖は頂点へと達した。意味のないことを喚きちらしながら、彼は手にしたナイフを滅茶苦茶に振り回しあげた。

「ひーつ、来るなつ、来るなつての。来たらほんとに刺すぞ、後悔するぞ、てめえ！」

そんな木戸を冷ややかに見下ろしながら、聰平は落ち着きはりつて狙いをさだめるとベルトをひゅんと一閃させた。たちまち木戸の手からナイフがはじけ飛ぶ。ぎやつと悲鳴を上げ、彼は右手を押されて呻吟した。どうやら指の骨が折れたようだ。

「あああ、お楽しみはこれからよん」

聰平は、今度はバックルのほうを持ち手に変えると、それでもつて狂つたように木戸を打ちはじめた。革製のベルトがムチのようになり、木戸の体を容赦なく痛めつける。服の上からでも、肉のきしむ音が聞こえてくる。ひいひい言いながら地べたをのたうち回つたあげく、ついに彼はしゃーっと失禁してしまつた。

「ひーーつ、ひーーつ、止めて、もう止めてくださいよ、お願ひします」

「それを言つなら、おゆるじトセイ女王様でしょ」

「おおお、おゆるしぐださい女王様、これからは心を入れかえて眞面目に生きます。もう決して他人をイジメたりしませんから」

「西郷どんの、敬天愛人の精神じやつど」

「わわわ、分かりました。分かりましたから、もう止めてー」

「ほーほほほ。もう最高にいい気分だこと。まるで夢みたいね。浮世の中に、こんなに気持ちのいいことが残されていたなんて」

泣き叫びながら許しを乞う木戸を追い回し、聰平は嬉々として革のベルトを振るつた。もづ、めつた打ちである。木戸は小便のためアンモニア臭を放つジーンズを引きずりながら、殺虫剤をかけられた「ゴキブリ」のように這い回つた。

「ひいいつ、ひいいーつ」

「おーほほほ、無抵抗な者をいたぶるつて、なんて楽しいんじょ。ああっ、いいわー、あたしもういきそうよー、このままいつちやつてもいいかしら」

サディズムとは、もしかすると人間をふくめたすべての肉食動物に根源的に備わっている生命衝動なかもしれない。じわじわと獲物を追いつめてゆく悦び。そして追いつめた獲物の息の根を止める興奮。木戸を思う存分打ち据えることによって、彼は次第に恍惚の境地へと入りこんでいった。もづ、このまま絶頂を迎えるしかない。そう覚悟をきめると彼は、両手にしつかり握つたベルトを大上段に振りかぶつた。

「じゃあ最後に、きつーー一発お見舞いするわよ。

「や、止めてえええつ」

「ちえすとおーつ！」

紫電一閃

振り下ろしたムチは、小便でぐしょぐしょに濡れた木戸の股間を

直撃した。

「ひぎやーつー！」

衝撃で体がびくんと跳ね上がり、あまりの痛みに木戸はうーんと目をまわしながらブリつと脱糞した。同時に聰平のほうも、うつと呻いて白目をむく。パンツの中で、何かがほとばしる感覚があつた。わなわなと体が震える。がくつと膝をついて放心状態になると、や

がてその体から、なにやら邪悪な存在がすりと抜けていった……。

気がつくと、聰平は一人ぼっちで公園ベンチの前にたたずんでいた。すでに日はとつぱりと暮れ、道路をへだてて隣接する野球練習場からはナイター設備の明かりが漏れだしている。

木戸と山崎はどうやら、命からがら逃げおおせたらしい。聰平の前には盗んできたと思われる自転車だけが乱暴に乗り捨てられていた。

少し肌寒い。ぶるっと身震いしてから、彼はそっと股間に手を当ててみた。パンツの中が、どろつとした液体で汚れているのが分かる。ふうと息をつく。なんだかとても疲れた。でも、けっしてい嫌いな疲れじゃないとも思う。むしろスポーツで汗を流したの後のような開放的で心地よい疲労感だ……。

彼は今、自分がとても清々しい気持ちになっていることに気づいた。これまで自分をがんじがらめに縛りつけてきた、とても窮屈な空間から解き放たれた思いがする。

素敵だ。

ゆつくりと肩の空を見上げてみる。

人間つて本当に素敵だ……、口では上手く説明できなけれど、なぜだか素直にそう思えた。

人は、他人に痛みを与える、あるいは他人から与えられた痛みを受け止めることによって、生命に宿る神秘というものを強く感じ取つて生きている。そんな氣がする。きっと、人の一生というものは、ある意味においては苦痛でもあらうし、またある意味では快樂そのものに違いないのだ。理屈はよく分からぬが、そんな確信めいた思いが聰平の心を満たしていた。

みんな、あの悪霊のお姉さんのおかげ……かな?

ふと、あたりを見回してみる。彼女の姿はもうどこにもなかつた。

どこへ行ってしまったのか、もはや気配すら感じない。やつと満足して天国へ上ったのか、それとも飽くなき快樂をもとめて再びどこか遠いところへさまよつていったのか……。

いざれにしても、自分はもう彼女と会つことはないだらう。

なぜなら、

僕は、がんばつて生きてゆくんだ

今、力強くそう思うことが出来るからだ。

不意に彼は、自分の右手が今もベルトのバックルをしつかり握りしめていることに気づいた。あのお姉さんが、木戸をさんざ打ち据えたベルトだ。ふと思いつつ、ベルトをつかんだ腕をゆっくりと振り上げてみる。なんだか胸がときめいた。大きく息を吸いこみ、いち、にの、さん、で反動をつけて、ムチのように思い切り振り下ろした。ぴしつ、と鋭い音がして足下の砂利がはじけ飛ぶ。心臓がどくんと脈打つた。最高に気分のいい音だ。

知らず知らずのうちに、顔がほころんでいた……。

了

後篇の後篇の前篇（ウソですか……最終話です）（後書き）

お読みください、ありがとうございました。

名野創平さんは、去年開催された『犯罪が出てこないミステリー企画』で知りました。最初にその作品を読んだとき、なんて美しい文章を書く人だろうと思いました。しかも読者を飽きさせないよう、終始エンターテイメントに徹している。すごい人がいるもんだなあと感心し、以後ボクは名野創平さんのこと、勝手に永遠のライバルと決めてしました。

今回こうして、名野創平さんのお誕生日にちなんで作品を投稿させていただきましたが、内容がぶつ飛んでいるのは名野創平さんの作品からそういうインスピレーションを得たからです。本当に面白いですから、ぜひ読んでみて下さってね。

でわでわ～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5746j/>

S M二元論の主張

2010年10月8日15時24分発行